

津村先生を偲んで

南山大学人文学部心理人間学科 土屋 耕治

津村俊充先生を偲んで、私が先生と過ごした日を思い出し、心に浮かぶものを記しておきたいと思う。

津村先生との思い出は多い。私が2011年に着任したときに「社会心理学ゼミ」の担当をしておられたが、そのゼミ名を私に引き継いでくださり、ご自身は「ファシリテーション研究ゼミ」を立ち上げられた。私の最初の1年は、一緒に「社会心理学ゼミ」を担当してくださり、学生同士の関係の作り方、サポートの仕方など、側で学ぶことができ、とてもありがたい経験となった。Tグループや、日本体験学習研究会のスタッフとしてご一緒させていただいたりもし、場を見て、どうその場に関わるかということに肌を持って触れられたことが大きな財産となっている。

ここでは津村先生が晩年、大切にされていたと私が感じたことを一つ紹介したい。

津村先生が退職された後、大学にいらしていたときに、研究室を訪ねてくださったことがあった。そのとき、ご自身がラボラトリー方式の体験学習と関わってきた中で大切だと考えていたことがこの本の中に明確に表現されていると高揚感とともに話してくださった。

それは、エドガー・シャイン氏（津村先生はシャイン氏を、なかでも『プロセス・コンサルテーション』を特に好まれていた印象を持っている）が『対話型組織開発』（当時は翻訳も出る前の段階であったが）の序文に書かれた「探究の精神」(the spirit of inquiry)に関する部分であった。初期のTグループにおいては、津村先生から見れば、メンバーやグループをある状態に持っていきこうと操作的に関わるトレーナーがおり、ご自身にとって反面教師となっていた、というお話しをよくされていた。

シャイン氏の序文から関連する箇所を下記に抜粋した（ページは翻訳版）。

「ラボはさまざまな種類の体験的な実習を通して、探究の精神を育むと同時に多くの教えも授けていたのである (p. 21)。」「対話型ODは、OD本来の精神を再確認させてくれる。それは、実践者は探究のプロセスの推進者だが、自ら成果をコントロールせず、探究の答えも予め用意しないというスタンスである (p. 23)。」

誰かが描いたシナリオではなく、一人ひとりが「今ここ」の関わりから探究をしていく場が、ラボラトリーであり、ファシリテーターはそうした場に、ともにいるということであるだろう。

「土屋さん、ともに探究するということが大切なんだ。」

津村先生の笑顔とともに、これからも幾度となく思い出す言葉をもらったと思っている。

引用文献

Shein, E. H. (2015). Dialogic Organization Development: Past, Present, and Future. In G. R. Bushe, & R. J. Marshak, (Eds.) *Dialogic Organization Development: The Theory and Practice of Transformational Change* (pp. vii-xiv). Berrett-Koehler Publishers, Oakland, California.

(ブッシュ, G. R., & マーシャック, R. J. 中村和彦 (訳) (2018). 対話型組織開発: その理論的系譜と実践 英治出版)